

国立国語研究所学術情報リポジトリ

'Location Nouns' and 'Motion Verbs' : A Comparative Study of Chinese and Japanese Grammar

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 方, 美麗, FANG, Meili メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002077

「連語論」<「移動動詞」と「空間名詞」との関係> ——中国語の視点から——

方 美 麗
(筑波大学)

キーワード

連語, 移動動詞と空間名詞との関係, カテゴリカルな意味, 結合能力

要 旨

形式面からみれば、日本語の「N格+V」構造は中国語の“V+N”に当たるが、日本語の「国を出る」(「Nを+V」)形式は中国語の(“出”国) (“V+N”)に当たり、同じ意味的な結びつきの「田舎を出る」の場合は、中国語では「“離開” 郷下 (“V+N”)になる。このように、日本語で同一の出発動詞を用いた「空間名詞を+出発動詞」という構造に対応する中国語の“V+N”において、“V”が別々の動詞によって表現されることがある。本稿では、日本語の「N+V」構造と中国語の“V+N”構造との結びつき方の相違を中心に考察した。その結果、中国語の動賓構造における“移動動詞+空間名詞”の組み合わせに表現される意味関係の下位区分が明らかになったり、格が存在する日本語より格が存在しない中国語の動詞と名詞との結びつきのほうが、その組み合わせがより限定的な下位のカテゴリカルな意味を要求することが明らかになった。また、日本語と中国語で同じようなカテゴリカルな意味の動詞が使われる場合でも、動作の結果性の表現に違いがあって、その点からも日本語の「N+V」と中国語の“V+N”の文法的な意味が同一でない場合があることも明らかになった。

なお、本稿は日本語の連語の研究を深めることを直接の目標としたものではないが、日本語の名詞と動詞の組み合わせ及びその結びつきの特徴のうち、日本語の連語現象だけをみていたのでは明らかにならなかった側面を、中国語との対照によって明確に浮かび上がらせることができた点で、日本語の連語の研究にも寄与する可能性をもつであろう。

0. はじめに

名詞と動詞との関係は、形式的には日本語では動詞の前に置かれる名詞の格のかたちで表現される。これに対して、中国語では動詞が名詞の前に立つ“動賓構造”(“V+N”)と、動詞に補助動詞が付く“動補構造”(“VA+N”)と、介詞を伴った名詞が動詞の前に置かれる“介詞構造”(“PN+V”)などのタイプで表現される。本稿では、これらの中国語のタイプの中から特に“動賓構造”(以下“V+N”で示す)に焦点を当て、中国語の“移動動詞”と“空間名詞”との組み合わせの意味関係と、日本語の「空間名詞(格)」(以下「N」で示す)と「移動動詞」(以下「V」で示す)の組み合わせの意味関係の相違について述べ、そこから取り出される支配する動詞と支配される名詞との意味的な特徴について考察したい。

1. 先行研究

移動動詞と空間名詞の連語研究は、日本語においては、名詞と動詞のカテゴリカルな意味¹を踏まえて進められてきている。言語学研究会編1983『日本語文法・連語論（資料編）』（むぎ書房、以下『連語論』と称する）では、動詞と名詞のカテゴリカルな意味の違いに注目して、動詞を核とする組み合わせの中における〈結びつき〉を体系的にとらえている。『連語論』でいう連語とは陳述的なものではなく、支配する単語と、それを限定する支配される単語との意味関係（すなわち文法関係）であって、単語と並んで現実の断片の複合的な名づきの単位になっている。例えば、移動動詞と空間名詞との結びつきは、まず、核となる移動動詞の語彙、文法的な意味に基づいて分類される。「行く、来る、登る、上がる」などの動詞が「に格の空間名詞」と組み合わせると〈目的地の結びつき〉を作ることができる。つまり、〈目的地の結びつき〉を作るのは、これらの核となる移動動詞が場所と関わる〈方向性〉という共通の側面を持っているからである。この共通の側面〈方向性〉がカテゴリカルな意味である。それによって、これらの動詞は方向性移動動詞と名づけることができる。この方向性移動動詞が「へ格の空間名詞」と組み合わせると〈行く先の結びつき〉を作ることができ、「まで格の空間名詞」と組み合わせると〈到着の範囲の結びつき〉を作ることができる²。しかし、「歩く、走る、はう、かける、泳ぐ」などの移動動詞は、「に格、へ格の空間名詞」を限定することができない³。それは、これらの動詞は目的地への動作よりも、移動動作の形態あるいは〈様態性〉を示す（宮島1994ではこれを「移動法」という）という共通の側面を持っているからである。〈様態性〉というカテゴリカルな意味をもつ移動動詞が場所を示す「を格」の名詞と組み合わせると、その動作は「を格」の示す場所における移動の動作の形態を表すことができる。

『連語論』はこのような考え方により、支配する単語である「移動動詞」を〈方向性移動動詞〉、〈様態性移動動詞〉、〈通過動詞〉、〈出発動詞〉の4つに分類し、支配される単語である「に格、へ格、まで格、を格、から格」の空間名詞との意味的な関係を明確にしている。筆者はこれを表1のようにまとめた。『連語論』のようなかたちで単語と単語との間の結びつき方を明確にすれば、言語の間で、単語と単語との意味関係の類似や区別を明らかにすることが可能になるであろう。

1.1. 日本語の移動動詞と空間名詞の連語

『連語論』における〈「空間名詞」と「移動動詞」との組み合わせ〉をまとめてみると表1の五つのタイプになる。移動動詞と組み合わせる空間名詞の格は「に格、へ格、まで格、を格、から格」であるが、「移動動詞」は次の四つのタイプに分類されている。以下『連語論』から引用する。

方向性の移動動詞「いく、くる、もどる、のぼる、あがる、おりる、くだる、まわる、すすむ、まがる、むかう」など。様態性の移動動詞「あるく、はしる、はう、かける、およぐ、とぶ、すべる、つたう、たどる」など。通過動詞「とおる、わたる、越える、ぬける、過ぎる、経る、横切る」。出発動詞「出る、たつ、さる、とおざかる、離れる、退く」など。

表1では『連語論』の記述から移動動詞に関する部分を抜き出し、支配される名詞の格のかたちも考慮した上で、〈方向性移動動詞〉（の一部）と〈様態性移動動詞〉を合わせて「方向性・様態性の移動動詞」に分類しなおして、五分類の表にまとめた。

表1 日本語の連語

結びつき	名詞	動詞
〈動作と目的地との結びつき〉 例：	空間名詞に/へ 田舎に	方向性移動動詞 行く
〈動作と移動の範囲との結びつき〉 例：	空間名詞まで 田舎まで 田舎まで	方向性・様態性移動動詞 行く 歩く
〈動作と移動する場所との結びつき〉 例：	空間名詞を 田舎を 道を	方向性・様態性移動動詞 行く 歩く
〈動作と通過地との結びつき〉 例：	空間名詞を 田舎を	通過動詞 通る
〈動作と離れる場所との結びつき〉 例：	空間名詞を/から 田舎を/から	出発動詞 出る

1.2. 中国語の連語研究

ヤーホントフ（原著1957）は「動詞の後に立つ名詞は必ずしも、すべてその動詞の目的語であるとは限らないと見なすほうがより正しいということになる。」（1987：43）といい、“移動動詞”と“空間名詞”との関係については「自動詞とともに用いられる場所の目的語や連用修飾語は、大体、動作の主体が、それに沿って運動する（または、その主体がある）場所か運動の終着点かの、いずれかを意味する。運動の出発点の意味を有する目的語や連用修飾語を支配するのは、運動の方向を表す二、三の動詞にすぎない。」と指摘した。このような動賓構造に複数のタイプを認めるヤーホントフの移動動詞と空間名詞との関係のとらえかたはかなり示唆的である。

また、朱徳熙は場所との関わりの中から動詞のタイプを“方向動詞（来，去，進，出，上，下，回），運動を表わす動詞（上，飛）と位置を表わす動詞（在，到）”（1982：114）の3つのタイプに分けた。だが、両者ともに移動動詞と空間名詞との関係を、上述したカテゴリーカルな意味に基づいたタイプへと分類するまでには至らなかった。

そのほかにも、湯廷池（1987）、李臨定（1990）、相原茂（1997）などは中国語の動詞と名詞の関係の体系をとらえようとしているが、しかしながらもっとも新しい相原にしても“掛 牆上”（壁に掛ける）と“去 北京”（北京へ行く）（1997：147）は同じタイプの構造という考え方に立ち、動作の客体を表す“牆上”と、主体の行く先を示す“北京”と同質の名詞としてとらえている。たしかに形式面から両者の違いを見分けることは難しいが、明らかに両者は、単語の内容面（語彙・

文法の側面)において異なっていると考えられる。このように中国語の“動詞”と“目的語”との間の意味関係は未だに十分に整理されているとはいえない。重要なのはヤーホントフの示唆などを念頭において、中国語の“移動動詞”と“空間名詞”の関係をタイプのにとらえることである。

中国語の“移動動詞+空間名詞”の意味関係を体系的にとらえるにあたって、まず、『連語論』の考え方を参照しながら、「移動動詞」、「空間名詞」を語彙的、文法的な意味に基づいて分類すると、次の表2、表3のようになる。

表2 中国語の“移動動詞”の分類

A. 方向性の移動動詞
a. 到着性動詞“去(行く), 来(来る), 到(着く), 回(もどる), 上(上がる), 下(おりる), 出(でる)”など。(以下“方向性移動動詞”と示す)
b. 離れる動詞“下(おりる), 離開(離れる)”。(以下“離れる動詞”と示す)
c. 出発動詞“出(でる)”。
B. 方向性をもたない移動動詞(以下“様態性の移動動詞”と示す)
“爬(のぼる), 走(歩く), 逛(うろうろする), 跑(走る), 上(上がる), 下(おりる), 過(過ぎる, 通る)”。「移動の動作=プロセス動詞」を表す。

“下, 上”がA, B双方に出ていることについては後でふれる。

中国語の“空間名詞”⁴の分類について

本稿でいう“空間名詞”とは、“移動動詞”との関わりからみた語彙的な意味において、そのカテゴリカルな意味として“場所”という側面(特徴)をもつものである。例えば、本稿で“地点名詞”として扱う“学校, 図書館”などは、「行く」と結びついた場合は、到着の<場所>というカテゴリーになる。しかし、「造る, 建てる」と結びついた時は<建物>という別のカテゴリーになる。このような考え方により本稿での“空間名詞”についての下位分類は以下表3の八つのタイプになる⁵。

表3 中国語の“空間名詞”

地名名詞	“東京, 日本, 台北, 台南, 渋谷, 元町”など。これらは“地区, 行政区域”などのような広狭様々の場所を示し, 広い意味での“地名名詞”である(これらの名詞は方位詞が付かない)。
地点名詞	“図書館(図書館), 百貨公司(百貨店), 医院(病院), 学校(学校), 陽台(バルコニー)”など。これら“場所=地点”という共通点がある名詞を“地点名詞”と名付ける(これらの名詞は場合によっては方位詞が付く)。
通路性名詞	“路(みち), 小路(小さいみち), 大路(大きいみち), 砂路(砂みち), 柏油路(アスファルト道路)”など。これら“移動するための通路性空間”という共通点を持つ名詞を“通路性名詞”と名付ける。
斜面名詞	“山(山), 坂(坂), 斜面(斜面), 楼梯(階段), 電梯(エスカレーター)”など。これら“斜めの通路性空間”という共通点を持つ名詞を“斜面名詞”と名付ける。
横断面名詞	“馬路(横断舗道), 橋(橋), 河(河), 海(海), 天橋(陸橋), 斑馬線(横断歩道)”など。これら“横断するためのところ”という共通点を持つ名詞を“横断面名詞”と名付ける。
凹面名詞	“田(田), 井(井戸), 海(海), 地(地), 壕溝(塹壕), 地洞(竪穴)”など。これら“移動主体の立地点より低い位置にあるところ”という共通点を持つ名詞を“凹面名詞”と名付ける。(田, 畑は中国語では立地点より低い所にある場所と意識されている)。
凸面名詞	“台(台), 床(ベッド), 馬(馬), 車(車), 飛機(飛行機)”など。これら“移動主体の立地点より高い位置にあるもの”という共通点を持つ名詞を“凸面名詞”と名付ける。
枠内名詞	“門(門), 城(城), 国(国), 境(境), 獄(牢屋), 籠(籠), 窖(穴)”など。これらの“門または境界などによってくられた閉じた空間”という共通点を持つ名詞を“枠内名詞”と名付ける。

さらに, さきの表1の考え方に基づいて中国語の“移動動詞”と“空間名詞”の連語について分類を行うと表4のようにになる。

1.3. 中国語の移動動詞と空間名詞の連語

中国語の移動動詞と空間名詞は表2, 表3に示したように分類できるが, 連語としては, 大きく分けて以下のような三種の組み合わせが, 意味的な結びつきを実現している。

表4 中国語の連語

“V+N”の結合関係	動詞	名詞
＜動作と目的地との関係＞	「方向性の移動動詞」	「地名/地点/凹面/凸面名詞」
	去, 来/到, 回 例：去日本 例：到日本/回日本	“日本, 台北” (地名名詞) (日訳：日本に行く) (日訳：日本につく/戻る)
	下 例：下井	“田, 井, 海, 地” (凹面名詞) (日訳：井戸におりる)
	上 例：上台	“台, 床, 馬, 車” (凸面名詞) (日訳：台にあがる)
＜動作と移動する場所との関係＞	「様態性の移動動詞」	「斜面/通路性/地点/横断面名詞
	下/上/ 爬 例：下楼梯	“山, 楼梯, 斜坡” (斜面名詞) (日訳：階段をおりる)
	走/跑 例：走路	“路, 山路, 道路” (通路性名詞) (日訳：道をあらく)
	逛 例：逛街	“街, 公園, 市場” (地点名詞) (日訳：町をぶらつく)
	過 例：過橋	“橋, 馬路, 隧道” (横断面名詞) (日訳：橋をわたる)
＜動作と離れる場所との関係＞	「出発動詞/離れる動詞」	「枠内/地名/凸面名詞」
	出「出発動詞」 例：出国	“国, 門, 城, 獄” (枠内名詞) (日訳：国を出る)
	離開「離れる動詞」 例：離開日本	“日本, 台北” (地名名詞) (日訳：日本を離れる)
	下「離れる動詞」 例：下台	“台, 馬, 車” (凸面名詞) (日訳：台からおりる)

＜動作と目的地との関係＞は方向性の移動動詞“来, 去, 回, 到, 上, 下”と“地名名詞/地点名詞/凹面名詞/凸面名詞”類の名詞が組み合わさったものであり, ＜動作と移動する場所との関係＞は様態性の移動動詞“上, 下, 爬, 走, 跑, 過”と“斜面名詞/通路性名詞/地点名詞/横断面名詞”の名詞が組み合わさったものである。また, ＜動作と離れる場所との関係＞は“出発動詞, 離れる動詞”と“枠内名詞/地名名詞/地点名詞/凸面名詞”が組み合わさったものである。これらの組み合わせについての詳しいことは後述する。

このようにとらえた中国語の“移動動詞+空間名詞”連語と, 日本語の「空間名詞+移動動詞」連語との相違, 特徴, および両言語の連語に表現される「移動動詞」, 「空間名詞」の結合能力の相違を以下で考察したい。なお, 言語資料については, 中国語は公表された文献や大阪外国語大

学が作った「中国語学研究用テキストファイル」を使用した。出典名のないものは全て大阪外国語大学のテキストファイルから引用したもので、連語の部分に著者の訳(“仮訳”とする)をつけた。日本語は文学作品から用例をとり、また日中対照の分析については、日中文学対訳作品(方1997参照)の用例を加えて使用する。

2. 考察

日本語の「空間名詞+移動動詞」の結びつきは五つの意味関係に分かれるが、中国語の“移動動詞+空間名詞”の結びつきの意味関係は三つになる。以下、中国語と日本語のそれらの結びつきにおける相違、また、それぞれの「V」と「N」の振る舞い方についての対応関係を考察する。まず、〈動作と目的地との関係〉における日本語と中国語の表現についてみていく。

2.1. 中国語の〈動作と目的地との関係〉について

中国語の〈動作と目的地との関係〉は動詞の指し示す動作が、名詞の指し示す場所を目的地としている。この場合の「移動動詞」は“去/来/回/下/上”などの方向性の移動動詞で、「空間名詞」は“地名名詞/地点名詞/凸面名詞/凹面名詞”である。(動詞部分には■を加筆)

1. 自費去日本學習語言的就學生約……, (「大阪外国語大学」)
「地名名詞」(連語の仮訳: 日本に行く)
2. “我一個月之後就不去圖書館了……”
「地点名詞」(仮訳: 図書館に行く)
3. 我必須要搭明日早上的船回東京,
「地名名詞」(仮訳: 東京に戻る)
4. “你不必再到百貨公司門口集合了, 送完東西直接回興亞寮去。”
「地点名詞」(仮訳: デパートに行く)
5. 我有個親戚買不到票當黃魚, 上了船給人抓下來了。(『中国語』) 2000年10月号 p.63
「凸面名詞」(仮訳: 船にのりこむ)
6. 就扔了玉米, 上樹去摘桃子。(『中国語』) 2000年10月号 p.54
「凸面名詞」(仮訳: 木にのぼる)
7. 上台領獎隊員難過得哭了,
「凸面名詞」(仮訳: 舞台にでる)
8. 他翻身上馬, 跑出草坪, 奔下水田,
「凸面名詞」(仮訳: 馬に乗る)
9. 他想馬上穿起衣裳就下地。(『駱駝祥子』)
「凹面名詞」(仮訳: 畑に行く)
10. “我這個隊長不下井, 誰下井。不勞累能挖出煤嗎?”
「凹面名詞」(仮訳: 井戸に降りる)

2.1.1. 日本語の〈動作と目的地〉の連語

日本語の〈動作と目的地〉の連語は、方向性の移動動詞と、「に格、へ格（「へ格」は「方向」というような区別がある）の空間名詞」との組み合わせである。この場合、「に格、へ格」の名詞は空間名詞一般である。

11. わたしは明日の朝の船で東京に帰らなければならないのだった。（「伊豆の踊り子」）
12. …うきうきした気持ちで学校に行きました。（「あしたの風」）
13. 目が覚めたら、すぐ町に出かける。（「走れメロス」）
14. 村人たちは野に出て仕事を始めていた。（「走れメロス」）
15. 左に曲がると、安西、敦煌に向かう。（「敦煌への道」）
16. 外に出て見たところで、行くさきのあてがあるわけでもなく、…（「前身」）
17. 私たちは…山に登りました。（「寧波——遣唐使の出入り口」）
18. 彼は月に二三回私のところに来て、…（「夜更けと梅の花」）
19. 省造は…玄関に迎り着いた。（「青い壺」）
20. 暗いトンネルにはいると、冷たいしずくがぼたぼたおちていた。（「伊豆の踊り子」）
21. 彼は砂浜に出て、磯づたいにぶらぶらと歩いた。（「砂浜にて」）
22. 一人で但馬の城崎温泉へ出かけた。（「城の崎にて」）
23. 山の頂上へ出た。（「伊豆の踊り子」）

2.1.2. 日本語と中国語の表現の相違

日本語の「空間名詞に格/へ格＋方向性の移動動詞」が中国語の“方向性の移動動詞＋地名名詞/地点名詞/凹面名詞”といかに対応するかについて述べることにする。

24. 山の頂上へ出た。（「伊豆の踊り子」）
到了山頂， （対訳）
25. 村人たちは野にでて仕事を始めていた。（「走れメロス」）
村子里的人到田野里開始工作。 （対訳）
26. 信州へ出るのは、この御番所が、第一の難関であった。（「入れ札」）
去信州，這個関卡是第一個最難通過的…。 （対訳）
27. 畑に出る（『中日大辞典』）p. 2000
下田（『中日大辞典』）p. 2000
28. アトリエへ行って絵を見せてもらい、…。（「胡桃割り」）
我們到畫室觀看了他的画， （対訳）
29. わたしは明日の朝の船で東京に帰らなければならないのだった。（「伊豆の踊り子」）
我必須要搭明日早上的船回東京， （対訳）
30. 我有個親戚買不到票当黄魚，上了船給人抓下來了。（『中国語』）2000年10月号 p.63
僕の親戚に切符が買えないので、闇で乗り込んだのがいたけど、乗船後に捕まって下ろ

されて、… (対訳)

31. 就扔了玉米, 上樹去摘桃子。(『中国語』) 2000年10月号 p.54

トウモロコシを放り投げると, 樹に登って桃をもぎ取りました。(対訳)

まず、「空間名詞」の表現について日本語と中国語の異同を論ずる。ここで注目したいのは、日本語の「に格の空間名詞」と中国語の“地名名詞, 地点名詞”と, “凹面名詞, 凸面名詞”との違いである。

中国語の連語において、動詞と結びつく名詞は、日本語に比べて動詞の語彙的な意味に強く制限される。そのため、“去, 回, 到”というような“目的地に向かって移動する動作”を表す移動動詞と結びつくのは、<動作の目的地>となるような空間名詞, すなわち“地名名詞, 地点名詞”に限られる。“山”や“海”のような、中国語では“目的地として到着可能な場所”とはいえない名詞は、“去, 回, 到”などとは組み合わせられない。中国語の“山”は“登らなければ到着できない場所”で、“海”は“航海する, あるいは潜ったり, 泳いだりする場所”である。“目的地として到着可能な場所”になるためには、方位詞によって到着が可能な部分(“去 山上” “去 海辺”)を明確にしなければならないのである。ただし、“山”が“富士山”や“五台山”のように地名化している場合は、“去富士山”や“去五台山”のような結びつきが可能になる。

一方、日本語の場合は「に格の名詞」は「東京, 野, 玄関, 山, 山の頂上」などのような名詞である。「山」や「海」のような名詞でも、方向性の移動動詞であれば「山に 行く」のような組み合わせが可能になる。しかしこのため日本人の中国語学習者は“*去山” “*去海”のような誤用をしてしまう。日本語の「山に 行く」という意味は山のある部分(例えば, 山のふもと, 中腹, 頂上のいずれの地点)に行ってもその意味は成り立つ。これを表現する中国語の組み合わせは“去 山上”になる。また、「海に 行く」という表現も海に到着するのではなく, 海に接した地点としての浜辺に行くという意味である。これを表現する中国語は“去 海辺”である。このように同じ移動動詞と空間名詞との組み合わせでも、中国語の方が場所性がより厳密に限定されている。

次に、動詞の表現に注目したい。まず、日本語の「Nへ 出る」は中国語の例24, 25 “到 N”, 例26 “去 N” と例27 “下 N” で表現されている。日本語の「出る」は「に格, へ格の名詞」と組み合わせあった場合, その名詞は<動作の目的地>を表すことが出来るが, 中国語の“出”は例24の「山の頂上へ», 例25の「野に», 例26の「信州へ」のような“地名名詞”タイプの名詞や例27の「畑に」のような“凹面名詞”タイプの名詞とは結びつかない。中国語の“出”は限られた意味の空間名詞(“場(舞台), 廷(法廷), 海(海)”)6でないと日本語の<到着>を表す意味の「出る」と対応できない。そのため、「山の頂上へ 出る」のように<到着>を表す場合, 中国語では, その場所に“到着する”という意味を表す動詞との組み合わせ“到 山頂”で表現される。

また、「畑に 出る」のような“移動主体の立地点より低い位置にあるところ”の名詞が使われると, 中国語ではそれと結びつくことが可能な動詞“下”で表現される。中国語の“下”が“下に向かっての動作”という意味で, 「到着する」ということを表わせるのは, そこに到着できるよ

うな“凹面名詞”との組み合わせに限られる(“下”については次の2.2でさらに取上げたい)。同じように、“上”は“上に向かっての動作”という語彙的な意味であるため、例5, 6, 7, 8の“船, 樹, 台, 山”のような“凸面名詞”としか組み合わせられない。同じ動詞を使う場合でも、中国語の動詞は制限された名詞を要求し、日本語より名詞と動詞の関係が厳密で、限定的である。中国語において、移動動詞ならびにそれと結びつく名詞のカテゴリーを細かく下位分類しなくてはならないのはこのためである。

日本語の〈動作と目的地との関係〉の「Nへ 出る」に対応する中国語は“到 N”(例24, 25)と“去 N”(例26)がある。まず、両者の対応関係を明らかにしておく。

“到 N”にも、“去 N”にもあたる日本語の「Nへ 出る」は〈目的地への動作〉であるが、中国語の“去”は“目的地に向かって移動する動作”で、“到”は“到着を想定した動作”である。日本語の「Nへ 出る」は「目的地に向かって移動する」から「目的地に到着する」までの段階を含んでいると考えられる。つまり、日本語の一つの動詞によって表されている意味が、中国語では二つに分割して表されている。動詞の限界性の側面⁷からみれば、“到”は“了”を付ければ「動作の達成」を表すことができるが、“去”は“了”を付けても「動作の開始」しか表せない。つまり、中国語の移動動詞は「動作の開始」(つまり“動作”)を表すか、または「動作の達成」(つまり“結果”)を表すかという点で対立する。一方、日本語の移動動詞においては「経過」と「結果」⁸の対立の存在が指摘されている。

このように、日本語の「Nに 出る」に対応する中国語の表現は“去”と“到”がある。“去”と“到”の違いは“目的地に向かって移動する動作”と“到着を想定した動作”である。

また一方では、中国語の“到 N”は、日本語の複数の格(「Nに 出る/行く」「Nへ 出る/行く」「Nまで 出る/行く」)に訳される。“到着を想定した動作”の中国語の動詞“到”は、中国語に比べて結果性の強い日本語の移動動詞に対応する言いまわしに好んで用いられるようである。例えば、次の例を参照。

32. 船まで迎えにいきますよ。(「伊豆の踊子」)

我們到船邊接你。 (対訳)

33. 到了公園后門, 他回了回頭, 還跟着呢。(『駱駝祥子』)

公園の裏門まで来てふり返ってみると、まだ尾いてくる。(対訳)

日本語の「まで格」「に格」「へ格」の名詞と移動動詞の組み合わせは「移動の範囲」「目的地」(「へ格」は「方向」というような区別がある)という違いがあるのだが、中国語では、それらを皆「到」で表現している。中国語の“到 N”で対応させるとしても、“到”は〈到着を想定した動作〉という意味で、日本語の本来の意味とのずれを感じる。

なお、結果表現における中国語の“動補構造”及び“介詞構造”表現に対応する、日本語の〈動作と目的地〉、〈到着範囲との関係〉の問題については今後の課題にしたい。

2.2. <動作と移動する場所との関係>

ここでは、<動作と移動する場所との関係>における中国語と日本語の表現についてみていく。

2.2.1. 中国語の<動作と移動する場所>の連語

中国語の<動作と移動する場所との関係>は様態性の移動動詞“走，爬，逛，跑，上，下，過”と“通路性名詞/斜面名詞/地点名詞/横断面名詞”との組み合わせによって表現される。

34. 我喜歡逛街，一個人默默地在街上散步。(『憩園』)
「地点名詞」(仮訳：街をうろつく)
35. “走路看書，小心車喲！”
「通路性名詞」(仮訳：道を歩く)
36. 上午走了三十里山路，中午又被阿大硬灌了兩杯，
「通路性名詞」(仮訳：山道を歩く)
37. 下了一段坡，身后被竹林拌住了，
「斜面名詞」(仮訳：坂を降りる)
38. 牯山有人來說，萬石頭下山了，不做管山員了。
「斜面名詞」(仮訳：山を降りる)
39. 下回搞一次爬山比賽不成吧？
「斜面名詞」(仮訳：山を登る)
40. “要過橋”的兩個主要條件。鳴鳳走在最后。他們很快地過了橋。
「横断面名詞」(仮訳：橋を渡る)

2.2.2. 日本語の<動作と移動する場所との関係>

<動作と移動する場所>の連語は、様態性の移動動詞と、「を格」の空間名詞との組み合わせである。

41. 楽々な本街道を行か，(「伊豆の踊り子」)
42. 坂道を走った息切れとおどろきで，(「伊豆の踊り子」)
43. その人は私を連れて庭を歩き，梅の木のあるトコロへ行くと，(「季節」)
44. バスは山路を登って北に進む。(「たけ」)
45. 外へ出る階段を，シメは勢いよく登った。(「青い壺」)
46. 弓浦市の町の坂を降りる道に(「弓浦市」)
47. 三人がかりでブレーキをかけて音を消しながら坂を下ってきたのだ。(「星夜」)
48. 何年か前に北極圏の上を飛行機で飛んだとき思い出した。(「季節」)
49. 僕などは東家の横を曲がり，…(「蜃気楼」)

2.2.3. 日本語と中国語の表現の相違

日本語の「空間名詞を＋方向性・様態性移動動詞」が中国語の“様態性移動動詞＋通路性名詞/斜面名詞/地点名詞/横断面名詞”にいかに対応するかについて述べることにする。

50. 楽々な本街道を行くか、…（「伊豆の踊り子」）
還是走平坦的大路？， （対訳）
51. 坂道を走った息切れとおどろきで、（「伊豆の踊り子」）
因為跑了斜坂而端不過氣來。 （対訳）
52. それから露に湿った三里の山路を駆け続けた。（「蠅」）
然后跑了二十多里被晨露打湿了的山路。 （対訳）
53. 階段をのぼる 作例
爬楼梯 仮訳
54. 弓浦市の町の坂を降りる道に、（「弓浦市」）
弓浦市的下坡路上， （対訳）
55. その山をおりて下田街道に出ると…（「伊豆の踊り子」）
下了山出来到下田街道時…… （対訳）

以上のように、日本語の「を格の名詞」はやはり空間名詞一般であるが、中国語では、空間名詞一般でなく、空間名詞の下位タイプ“通路性名詞/斜面名詞/地点名詞/横断面名詞”の四つである。日本語と違って、形態論的な格の違いを所有しない中国語では、動詞のカテゴリカルな意味として空間名詞のさらに下位の意味カテゴリーの名詞を厳密に選択することが要求される。まず日本語と中国語の動詞分類の相違から述べていく。

現代中国語の移動動詞は次のように分類されている。日本語の移動動詞の分類も付け加える。

	方向性の移動動詞	移動性の移動動詞
現代中国語	去, 来, 回, 上, 下, 進, 出, 過, 起, 開	走, 跑, 爬, 飛, 滾, 流
日本語	いく, くる, もどる, のぼる, あがる, おりる, くだる, まわる, すすむ, まがる, むかう	あるく, はしる, はう, かける, およぐ, とぶ, すべる, つたう, たどる (様態性動詞)

上のように、移動動詞は「方向性の移動動詞」と「動作性の移動動詞」(Li and Thompson 1981 (黄董範訳1983) ではこれを“移位動詞”としている。)とに分けられている。これは、日本語の方向性の移動動詞と様態性の移動動詞の分類に類似する。しかし、このような分類から中国語の移動動詞と空間名詞の意味関係をみるのは難しい。なぜなら、“方向性の移動動詞”の中の“上, 下”は、筆者が分類した“斜面名詞, 横断面名詞”と組み合わせれば、本来方向性の移動動詞でも、運動を表すことができるし、また、“下”が“凸面名詞”と、そして“出”が“枠内名詞”と

組み合わせれば、その名詞は〈動作と離れる場所との関係〉を表すことができるからである。そのため、筆者は現代中国語の一般の動詞分類に従うと、中国語の移動動詞と、日本語の空間名詞と組み合わせさせた「移動動詞」との違いがみえなくなると判断し、表2で示したように、中国語の移動動詞を大きく次のように分けた。それを簡略したものを再掲しておく。

方向性の移動動詞	様態性の移動動詞
到/ 去, 来, 回, 上, 下, 出	走, 爬, 逛, 跑, 上, 下, 過

日本語の動詞の語彙的な意味の特徴からは『連語論』のような「方向性の移動動詞」と「様態性の移動動詞」の分類でよいが、名詞が格を伴わない中国語では動詞のカテゴリカルな意味は、意味的に制約された下位の空間名詞のクラスとの関わりの中からでないのとらえられないのである。

では、日本語と中国語の動詞が実際にどのように違うのかをみていく。

例50のように日本語の「N に行く」の「行く」は本来なら、中国語の“去”に当たるが、ここでは様態性を示す移動動詞の“走”（「歩く」）で表現されている。日本語の「歩く」は「道路、運動場」などだけでなく、「を格」のかたちになれば、「日本、東京」のような名詞とも組み合わせることができる。一方、中国語の“走”は、“路、山路、道路、砂路”などのような「通路」を表す名詞、あるいは“運動場、巷子（横町、路地）、小径（小道、細道）、草坪（芝生）”などのような「通路」になりうる場所を表す名詞とは組み合わせるが、「日本、東京、学校」のような地名名詞、地点名詞とは組み合わせられない。“走”が表すのは“通路における人や生き物の歩行移動”という動作であり、地名、地点名詞は、「通路」を表すことができないため、“走”とは組み合わせられないのである。なお、列車を対象とする“鐵路”（線路）や、船あるいは飛行機の指定進路の“航路、航道”（航路、水路）の場合、通路性はあるものの、人が移動主体でないので、“走”の移動する場所にはならない。

では、中国語の“去”と“走”がどのように違い、日本語とどのような対応関係にあるのかをみてみよう。

	日本語		中国語
<移動する場所>	木曾路を 行く	→	× [去 木曾路] ○ [走 木曾路]
<到着点>	木曾路へ 行く	→	○ [去 木曾路]

日本語の「行く」は「に、へ格の空間名詞」とも「を格の空間名詞」とも組み合わせる。「を格」と組み合わせると、その場所は〈動作の移動する場所〉になるが、中国語の“去”は空間名詞と組み合わせさせて、「目的地への動作」を示す用法にしかない。つまり“去”は目的地に向かって移動するタイプで、『連語論』の分類した方向性の移動動詞のタイプの動詞である。それゆえ、日本語の「木曾路を 行く」は、移動の仕方、様態に注目した移動動詞の“走”に置き換えなくて

はならないのである。中国語の動詞が日本語に比較して限定された名詞でないと組み合わせられないことは、日本語の動詞との大きな違いになるといえよう。

また、例53の日本語の「Nを のぼる」と中国語“爬 N”についてだが、日本語の「のぼる」は「Nを」と組み合わせると「上へ移動する」〈動作の移動する場所〉の結びつきを表すことができる。中国語の“爬”は日本語の「のぼる」とは用法が違う。“爬”は、かなり限定された意味の名詞でないと“上へ移動する”という意味を表すことができない。つまり、本稿で分類した「斜面名詞」のような名詞である。“爬”が斜面名詞以外の名詞と結びつくときは、“V+N”という動賓構造ではなく、介詞“在”を伴った名詞の介詞構造（“在N方位詞 V”例えば“在地上爬”という状況的な結びつき）で表現されるタイプになる。この場合は、「のぼる」というより「這う」動作を表し、カテゴリーカルな意味の側面が異なってくる。

さらに、例54の日本語の「Nを おりる」についてであるが、日本語の「おりる」は「Nを」と組み合わせると「下へ移動する」〈動作の移動の場所〉の結びつきを表すことができるが、これに対応する中国語の“下”は「おりる」と用法が違う。中国語の動詞“下”について「下に向かう動作」で、“馬、車、台、床”のような“凸面名詞”と組み合わせさせた場合、それらの空間が指し示す場所は運動の「出発点」を示すことになるが、“下”が“山（山）、楼梯（階段）、電梯（エスカレーター）”のような“斜面名詞”タイプの名詞と組み合わせさせた場合、それらの場所は、その動作がそれに沿って運動をする。つまり、「移動する空間」を示すようになる。また、“下”が“田、井、地、海、洞”のような“凹面名詞”タイプと組み合わせさせた場合、それらの名詞が指し示す場所は「運動する方向＝到着点」となるのである。従って、中国語の“下”は〈出発〉、〈到着〉のような運動の限界点のみならず、〈運動のプロセス〉をも表わしているのである⁹。

一方、日本語の動詞「おりる」も中国語と同じく〈出発〉、〈到着〉及び、〈運動のプロセス〉の意味を表すことができる。しかし、〈出発〉を表す場合、空間名詞は「を格」「から格」を伴い、〈到着〉を表す場合、名詞は「に格」を伴う。また、〈運動のプロセス〉を表す場合、名詞は「を格」を伴う。要するに、日本語の場合は「名詞の格」が文法的な意味を表し、動詞を分けているのに対し、文法的な手段にたよれない中国語では、日本語よりも細分化された名詞のカテゴリーカルな意味の違いに基づいて、それが表現されているのである。

一方、日本語においては、動詞を限定する名詞の格が、その結びつきに影響を与えている。例えば、方向を示す移動動詞は、「に格」の場所を要求して〈目的地〉の連語を作ることができる。その「に格」の空間名詞を「を格」へといれかえると〈移動する場所〉の連語になる。しかし、それは後述するように名詞のカテゴリーカルな意味にも関わっているだろう。

日本語		中国語
例：二階に上がる	(○)	上 二楼 (○)
を	(×)	走 二楼 (×)
例：坂を上がる	(○)	上 坡 (○)
に	(×)	走 坡 (×)

上にみるように「二階」は「に格」と組み合わせやすいが、「を格」とは組み合わせにくい。一方、「坂」は「を格」と組み合わせやすいが、「に格」とは組み合わせにくい。このように、日本語でも名詞の意味が結びつき能力に影響する場合がある。しかし、結びつきの違いは日本語では、まず、名詞の「に格」と「を格」で区別される結果、いずれの場合も動詞は「上がる」で差し支えない。

これに対し、中国語では格の区別をしないので、到着点の場合は“上”，移動する場所の場合は“走”のように異なった動詞で表現する。日本語では「に格」と組み合わせるか、「を格」と組み合わせるかという名詞の文法的な側面の問題である。一方、中国語では「に格」で表現される意味関係は“上”と“地点名詞”（この場合“二楼”は“凸面名詞”との連続性を感じる）の組み合わせで、「を格」で表現される意味関係は“走”と“斜面名詞”との組み合わせによって表現される。しかし、「二階」と「坂」の違いのように、日本語でも「到着点となる場所を表す名詞」か「移動する場所を表す名詞」かという違いが結びつきに関係する。「二階を 上がる」がいえないのは、日本語の場合も、どのような結びつきを作るかに名詞のカテゴリカルな意味（下位のものであるが）が関係するからであろう。このようなことから日本語においても部分的には空間名詞というカテゴリーを更に細分化する必要性が出てくるかも知れない。

2.3. <動作と離れる場所との関係>

<動作と離れる場所との関係>は、動詞の指し示す動作が、名詞の指し示す場所を離れるという意味を表す動詞と名詞の関係である。

2.3.1. 中国語の<動作と離れる場所>の連語

中国語の<動作と離れる場所との関係>は離れる動詞“下”“離開”¹⁰及び出発動詞“出”¹¹が“凸面名詞/地名名詞/枠内名詞”との組み合わせによって表現される。

56. 這次是出國，要整整三個月。
「地名名詞」（仮訳：国を出る）
57. 像城里人一樣，不出門就能把電話撥到北京，
「枠内名詞」（仮訳：外出する／門を出る）
58. 王公伯登上一輛自行車下了城，
「枠内名詞」（仮訳：城を離れる）
59. 門虎下了馬，把馬系在大門前側一棵柏樹上。
「凸面名詞」（仮訳：馬から降りる）
60. 連忙迎下台來。
「凸面名詞」（仮訳：舞台から降りる）
61. 到了錢家，覺新剛剛下轎就聽見里面的哭聲。
「凸面名詞」（仮訳：駕籠から降りる）

62. 連一秒鐘也沒有想到，也可以離開北京，
「地名名詞」（仮訳：北京を離れる）

2.3.2. 日本語の〈動作と離れる場所〉の意味の連語

〈動作と離れる場所〉の連語は、出発動詞と、「を格，から格」（「から格」はくでどころ）というような区別がある。）の空間名詞との組み合わせである。

63. 五郎さんの家の門を出る…（「夏みかん」）
64. 旅館の台所口から出て、歩き出す幾代は、…（「水」）
65. 東京を出るときから…（「高野聖」）
66. 夜半を過ぎてから私は木賃宿をでた。（「伊豆の踊り子」）
67. 自動車が故障したので、暫く車から降りて散歩しました。（「石を抱いた木」）
68. 私はいつものように電車から降りて、…。（「おじさん，“寒いね”」）
69. 彼女は太急ぎで彼の傍らを離れた。（「日曜日は赤」）

2.3.3. 日本語と中国語の表現の相違

日本語の「Nを（から）+出発動詞」と中国語の“下，離開+凸面名詞/地名名詞”，“出+枠内名詞”とどのように対応するかを述べる。

70. 五郎さんの家の門を出る…（「夏みかん」）
一出五郎家裏的門……（対訳）
71. 旅館の台所口から出て、歩き出す幾代は、…（「水」）
出了旅館的厨房門走起来的幾代，…（対訳）
72. 東京を出るときから…（「高野聖」）
自從離開東京…（対訳）
73. 夜半を過ぎてから私は木賃宿をでた。（「伊豆の踊り子」）
過了半夜之後，我離開了小客棧。（対訳）
74. 自動車が故障したので、暫く車から降りて散歩しました。（「石を抱いた木」）
汽車出了故障，所以下車散步了一会兒。（対訳）
75. 私はいつものように電車から降りて、…。（「おじさん，“寒いね”」）
我同往常一樣下了電車以後，…。（対訳）

例70, 71, 72, 73のように、日本語の「Nを（から）出る」は中国語の“出 N”と“離開 N”で表現され、例74, 75のように、日本語の「Nから降りる」は中国語の“下 N”で表現される。日本語では「を格（から格）の空間名詞」が「出発動詞」と組み合わせさって〈動作と離れる場所の結びつき〉を作ることができる。一方、中国語の場合、例70, 71の“門”のような“枠内名詞”タイプと例72, 73のような“地名名詞”タイプと、例74, 75のような“凸面名詞”タイプが異な

ったタイプの動詞によって表現されている。中国語の“門”は「くくられた閉じた空間の枠」を表す名詞で、「ある枠内から出て行く」という動作でなければ、それと組み合わせることができない。また、“東京、木賃宿”は「発着地になる地名」を表す名詞で、「場所から離れて行く動作」でなければ、それと組み合わせることができない。中国語ではある枠内から出て行く動作は“出”で、都市や、国名で示されるような場所から離れていく動作は“離開”で表現されるからである。ところで、中国語の“出”は、“百貨公司”や“松林”のような明確な境界を持った施設や場所を表す名詞とも組み合わせることができる。

- 76. 她出了轿子，把大廳上站著的几个男子膘了一眼，
「枠内名詞」（仮訳：駕籠から出る）
- 77. 出了嫂嫂底房間，又回到自己底房里來。
「枠内名詞」（仮訳：部屋から出る）
- 78. 我出了百貨公司，看見他沒走遠，
「枠内名詞」（仮訳：デパートから出る）
- 79. 出了松林。前面是一片白亮亮的湖水，
「枠内名詞」（仮訳：松林から出る）

中国語では場所によって離れていく動作表現が異なるが、日本語ではそのような違いが形式的には表現されない。つまり、日本語の「Nを 出る」は中国語では“出”（出て行く）という動作と“離開”（離れていく）という動作に分かれるのである。

ところで、“出”の用法に関して、中国語の動詞は、より限定された意味の名詞としか結びつかないため、動詞と名詞との関係が単語か、連語かを見分けることが難しい。一つの分析として、荒川(1984)は中国語の“出”との組み合わせを慣用的なものだとしている。しかし、本稿では、動詞と名詞との組み合わせに虚詞が挿入可能なもの、あるいは挿入しても本来の動詞と名詞の関係と変わらないものを連語と認定する。例えば、慣用句の“出 家”は虚詞の“了”を挿入することができないが、“出 門”は“出”と“門”との間に“了”を挿入することができるし、挿入しても“出”と“門”との関係は変わらない。

このように、形式面では日本語の「Nを十V」（「門を 出る」「東京を 出る」）は、中国語の“V＋N”（“出 門”“離開 東京”）に対応するが、同じ「出る」動作でも、中国語では結びつく名詞によって動詞を使い分ける。同じ動詞と名詞の組み合わせのようにみえても、中国語は日本語と比べて、結びつく名詞のカテゴリーはより限定的である。

これに対して、日本語では動詞を限定する名詞の格がその結びつきに影響を与える。

- 「田舎を 出る」 × [出 村莊] “離開 村莊”
- 「田舎に／へ 出る」 × [出 村莊] “到 村莊”
- 「田舎から 出る」 × [出 村莊] “從 村莊 来 (的)”

「田舎まで 出る」 × [出 村莊] “走到 村莊”

「出る」と組み合わせさせた名詞が「を格」をとると、その名詞は動作の<離れる場所>という意味を表し、「に格/へ格」の場合は、その名詞は<目的, 到着の場所>を表すことができる。また、「まで格」は<移動の範囲>を示すことになる。しかし中国語では、これらの違いは名詞の文法的なかたちによってではなく、異なった動詞を用いたり補助動詞あるいは介詞構造で表現することによって表し分ける。日本語の格助詞は文法上の意味を表現するものであるが、動詞と名詞のカテゴリカルな意味を十分に考慮せずに、単に格助詞の形式の違いだけを問題にすることは、文法上の意味が取り出せない点で十分でない¹²。

2.4. <動作と通過地との関係>

日本語の<動作と通過地>の連語は「Nを+通過動詞」によって表現されるが、これに対応する中国語の“V+N”表現は次の通りである。

80. 女たちが橋をわたってどんどん二階へ上がってきた。(「伊豆の踊り子」)

女孩子們過了橋很快的到二樓來了。 (対訳)

81. 海を越え山を越え、母を捜して三千里歩いて、「たけ」

翻山過海，跋涉三千里來尋母。 (対訳)

これらの例では、日本語の通過動詞は中国語では“過”¹³で表現されるが、日本語の通過動詞と中国語の動詞“過”と表している意味は違う。日本語では「Nを」と通過動詞が組み合わせると、主体がその場所を通過することを表しているが、中国語の“過”の示す動作は、限定された場所を通過することではなく、その場所に沿って(水平)運動をするというプロセスを表している。

“過”と組み合わせる名詞が動作の進行する場所であると考えられる根拠は、“過”は“電線竿”(電信柱)、や“樹的傍辺”(樹の傍)、“我的身傍”(私の傍)などのような名詞とは組み合わせられないという事実があるからである。これらの名詞の表す場所は非常に狭いため、瞬間的にそこを通過することになってしまい、動作のプロセスを表すことができない。したがって、“過”がこれらの名詞と組み合わせられないのは、“過”が通過し終わったところまでは表わさない、言い換えれば、結果の達成までは表わさないからであろうと考えられる。強いてこれらの名詞との組み合わせを実現したいなら、様態性の動詞が通過の結果を表す補助動詞(以下“A”で示す)“一過”を伴ったかたちをとり(“一過”は補助動詞になると達成を表すことができる)、場合によっては通過する場所を表す介詞(“P”で示す)“從”を伴わなければならない。

例えば、

“走過 我的身傍／從我的身傍 走過”(私の傍を とおる)

“走過 樹傍／從樹傍 走過”(樹の傍を とおる)

“走過 電線竿／從電線竿 走過”(電信柱を 過る)

このように、日本語の通過動詞は動作の結果まで表わしているのに対し、中国語の“過”は動

作のプロセスしか表していない。日本語の場合は中国語の動詞にはない結果性を含んでいるからである。日本語で〈動作と通過地との関係〉を表す「とおる」、「わたる」などに相当する動詞を中国語に求めると、それは“過”にあたるが、“過”は日本語の動詞と違って、動作のプロセスのみを表している。そのため、本稿では中国語の“過”と名詞の関係は〈動作と通過地との関係〉ではなく〈動作と移動場所との関係〉に入れているのである。“過”で通過の動作の達成を表したければ、上に示すように“V過”のかたちで表現されるか、名詞が“従N”のかたちで表現されるかでなければならない。日本語の「N格+V」が中国語の“V+N”、“VA+N”、“PN+V”で表現される場合、動作の結果性が強く表現されることによるものだといえる。

3. 結論

移動動詞と空間名詞の結びつき方にみられる、日本語と中国語のそれぞれの特徴について考察した。その結果、日本語は「空間名詞と移動動詞の組み合わせ」として五つの結びつきがあるのに対して、中国語の「移動動詞と空間名詞の組み合わせ」は三つの結びつきのみであることを確認することができた。その対応関係を表5に示すと次の通りになる。

表5 中国語と日本語の連語の対応関係

中国語	日本語
<動作と目的地との関係> 方向性V+地名, 地点/凹面N 例: 去 東京 例: 下 井 例: 到 東京	<動作と目的地との関係>Nに/へ+方向性V 例: 田舎に行く 例: 田舎へ行く <動作と移動の範囲との関係>Nまで+方向性V 例: 田舎まで行く
<動作と移動する場所との関係> 様態性V+通路性N/斜面N/地点N/横断面N 例: 下/上/爬 楼梯 例: 過 馬路	<動作と移動する場所との> Nを+方向性・様態性V 例: 田舎を行く <動作と通過地との関係>Nを+V 例: 田舎をとおる
<動作と離れる場所との関係> 離れるV, 出発V+枠内N/地名N/凸面N 例: 出 国 例: 離開 日本 例: 下 車	<動作と離れる場所との関係> Nを/から+出発V 例: 田舎を/から離れる 例: 山を/から下りる 例: 国を/から出る

このように中国語と日本語の対応関係を比較することにより、さらに次の点が明らかになった。

I. 中国語の三つの意味関係が日本語の五つの結びつきに対応するという両者の相違が明確になった。

その原因の一つは、日本語の〈動作の目的地の結びつき〉では動詞と組み合わせさせた名詞に「に/

へ格」がつき、〈動作の到達範囲の結びつき〉では名詞に「まで格」がつくことによって、両者が区別されるが、中国語では〈動作と目的地との関係〉という一つの表現形式だけで示されることである。「まで格」によって作られる日本語の〈動作の到達範囲〉は中国語の“到”が作る関係に相当するようにみえる。しかし、“到”が作る関係は「まで」によって表される関係とは違う。中国語の「到」は“到着を想定した動作”であるため、本稿では中国語の“到”と名詞の関係は〈動作の到達範囲〉ではなく〈動作の目的地との関係〉に分類できるのである。

そして、もう一つの原因は、日本語の〈動作と通過地との関係〉に対応する結びつきが中国語の“V+N”の組み合わせに存在しないことである。日本語の〈動作の通過地〉で表される通過動詞と空間名詞との関係には、中国語にはない結果性が含まれている。単純動詞に結果性が含まれていない中国語の“V+N”タイプでは〈動作と通過地との関係〉を作ることができない。同じ“V+N”の表現において、日本語と中国語とで動詞と名詞の結びつき方が異なるのは、動詞に含まれる結果性の違いによるものと考えられる。

II. 日本語と中国語の「動詞」と「名詞」の結合能力の相違点が明らかになった。

名詞と動詞の結びつきにおいて、両言語で同様の意味の動詞と名詞で用いられる場合、日本語では主に「名詞の格」によって文法的な意味が分けられるのに対し、中国語の場合、特定の下位のカテゴリーの名詞と動詞の結びつきによって表現されるか、または異なった動詞を用いたり、補助動詞あるいは介詞構造で表現したりすることになる。また同じ名詞であっても、日本語では動詞と組み合わせさせた名詞が形式名詞を伴わないのに対し、中国語では方位詞を伴って表現される。中国語の方が日本語以上に限定された意味の下位の空間名詞が要求され、動詞のカテゴリカルな意味により名詞の空間性の区分がさらに細かく要求される。空間名詞の分類については、日本語においても、「山にのぼる／山をのぼる」「二階に上がる／*二階を上がる」のように、名詞のカテゴリカルな意味を考慮に入れなければならないケースがあり、今後はこのような点も考慮にいれる必要がある。

語順に基づく類型論的な視点から日本語の「N+V」は中国語の“V+N”形式と対応するが、以上に示したように内容面では二つの言語のカテゴリカルな意味の区分が、それぞれ異なったカテゴリカルな意味の単語によって表現される。カテゴリカルな意味に注目すれば、対照研究は内容面まで発展する必要性がでてくるであろう。本稿は理論的に日本語の連語論を用いたかたちで進めてきたが、これまでみてきたように中国語の名詞と動詞とのカテゴリカルな意味の分類に関しては、日本語の分類をそのまま当てはめることができない。本論が試みた考察を通じて、日本語のみからは分析しがたい単語と単語の組み合わせの特徴を、中国語との対照により一層明らかに照らし出すことができるようになると思う。

注

- 1 「カテゴリカルな意味というのは文法的な結びつきとのかかわりにおける語彙的な意味の一般化である。」と規定されている。(奥田1985:162抜粋)。
- 2 「歩く, 走る, 泳ぐのように移動動作を形態という観点からとらえている動詞と語彙的な意味に空間をしめすまで格の名詞とがくみあわさると, 空間的なむすびつきをつくる。この空間的なむすびつきのなかでは, まで格の名詞は<終点>をあらわす。」(『連語論』 p 456抜粋)。というような区別がある。本稿では, このように区別しないで扱っている。
- 3 「行く」のような方向性の移動動詞は「に格, へ格」の空間名詞とも組み合わせるが, 「に格」は「へ格」と違う点もある。例えば, 「歩く」のような様態性の移動動詞の場合, 「に格の名詞」は明確なく方向性>が要求されるが(例えば, 西の方向に歩く), 補助動詞の助けにより動詞の結合能力を変える(例えば, 西に歩いていく)ことも可能である。
- 4 現代中国語では「空間名詞」を“処所詞”(朱徳熙1982)或いは“地方詞”(趙元任1980)と呼ぶ。これらの“処所詞”という術語は発話や答える時の状況により分類したもので, “場所性”があることを明らかにしている点で, 一定の意義があるが, 単語と単語の結合関係に表現されている単語のカテゴリ的意味の側面(文法的な意味)をみるには不十分である。なお, 名詞のトコロ性の問題については荒川(1984, 1985, 1992)など一連の考察に詳しいので参照されたい。
- 5 方位詞が付く“場所詞組”については, 今回は言及しない。
- 6 中国語の“出”と“場(舞台), 廷(法廷), 海(海)”との関係は, 自由な結びつきと異なっており, 慣用的なもののみられるが, これらの名詞に関する扱い方については, 今後の課題にした。なお, “出場”は「舞台上に登場する」という意味であるが, “入場”の“場”は「舞台」という意味ではない。
- 7 「結果性は, より一般化していえば, 動詞の意味のあらわす, 現象の段階の一部である。(中略)動詞は動作を任意の段階にくぎることができるはずだから, ちょっとみたところでは, おなじようにみえる動詞でも, 言語によってちがった段階までをふくんでいる, ということがある。(1994: 418)」と宮島が指摘しているように, 結果性の問題は文法的な問題である。工藤(1995)は限界性に基づいた動詞分類により, 移動動詞は限界動詞に, 様態動詞は非限界動詞だという。中国語における動作の限界性について, 馬慶株(1995)はそれらを“非持続性動詞”と“持続性動詞”とよび, 沈家宣(1995)は「有界」と「無界」としている。なお, 日本語と中国語の動詞の結果性の相違については, 宮島(1994)は池上(1994)と荒川(1984)の研究を元に「動詞の意味の範囲の日中比較」を行っている。大変示唆的な見解である。
- 8 宮島(1994:56)は「移動法と方向とはべつの観点からは, それぞれ経過と結果, といってもいい」という。
- 9 “下”について, ヤーホントフ(1957), 荒川(1984)などの先行研究がある。ヤーホントフは「運動の出発点を表わすこともできるが, 終着点も意味することができる。」という。一方, 荒川1984は“下”は<目的地>と<起点>の両方の対象をとるという。これらの先行研究を踏まえて, 筆者は“下”を<出発点><終着点>と<移動のプロセス>の三つの対象をとるものと分類している。
- 10 中国語の“離開”は, 二音節の単純動詞とされている。“離”は“走開, 推開”のような“動詞+補助動詞”のタイプと違って, 常に「開」を伴わなければならない。なお, “離”は“離京, 離境”という用法も存在するが, 現代語ではあまり使われない。
- 11 “出発”という動詞があるが, “出発”の場合は必ず出発する場所を表す介詞“從N”の後に置

くかたちで表現される。

- 12 格研究と連語研究との違いについて、鈴木2001「連語論の確立のために」に詳しい。
- 13 中国語の“調，渡”も“過”と似た性質がある。“翻”（越える，乗り越える）は，“山，壁（囲い，城壁）”としか結び付かず，“渡”は“河，海”という空間名詞としか直接に結び付かない。この結びつきは慣用的なものであろう。

参考文献

- 相原 茂 (1997) 『謎解き中国語文法』講談社現代新書
- 荒川 清秀 (1984) 「中国語の場所語・場所表現」『愛知大学外国語研究室報 第8号』
- 荒川 清秀 (1985) 「動作(3)とトコロ(場所)」『中国語』9, 16-18 大修館
- 荒川 清秀 (1992) 「日本語名詞のトコロ(場所)性—中国語との関連で—」『日本語と中国語の対照研究 論文集(上)』71-94 くろしお出版
- 荒川 清秀 (1996) 「日本語と中国語の移動動詞」『愛知大学外語研紀要 第22号』9-23
- 池上 嘉彦 (1994) 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ——日本語の「ヲ格+移動動詞」構造の類型論的考察——」『東京大学教養学部外国語科紀要』43, 34-53
- 奥田 靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 工藤 真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間表現—』ひつじ書房
- 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 鈴木 康之 (2001) 「連語論の確立のために」『国文学 解釈と鑑賞1月号』32-39 至文堂
- 松本 泰丈 (1985) 「連語の記述をめぐって」『国文学 解釈と鑑賞 3月号』至文堂
- 宮島 達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書房
- 宮島 達夫 (1996) 「カテゴリー的多義性」『日本語文法の諸問題』29-52 ひつじ書房
- C. E. ヤーホントフ (1957) 『中国語動詞の研究』橋本萬太郎1987訳 白帝社
- 朱 徳熙 (1982) 『語法講義』商務印書館
- 趙 元任 (1980) 『中国語的文法』中文大学出版社
- 湯 廷池 (1987) 『漢語詞法句續集』台湾書局
- 沈 家宣 (1995) 「“有界”与“無界”」『中国語文』1995第五期367-379
- 馬 慶株 (1995) 「時量賓語和動詞的類」『中国語文』1995第五期86-90
- 孟 慶海 (1986) 「動詞+処所賓語」『中国語文』第四期
- Li, Charles and Thompson, S. A. 1981. Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar: Berkley: University of California Press (黄萱範訳1983) 『漢語語法』, 台北:文鶴出版
- 李 臨定 (1990) 『現代漢語動詞』中国社会科学出版社
- 呂 叔湘 (1957) 『中国語語法分析問題』光生館
- 方 美麗 (1997) 「<物名詞を+他動詞>の連語と対応する中国語の表現」『国文学解釈と鑑賞7月号』33-41 至文堂
- 方 美麗 (1999) 「カテゴリーカルな意味~日中文法対照研究~」『国文学 解釈と鑑賞1月号』73-84 至文堂
- 方 美麗 (2001) 「言語教育のための対照分析及びその応用~日本語と中国語との対照分析から~」『国際日本学シンポジウム 新しい日本学の構築Ⅱ 報告書』20-28お茶の水女子大学人間文化研究科大阪外国語大学中国語学研究室輸入「中国語学研究用テキストファイル」

付 記

本稿は1999年10月に大東文化大学日本語文法研究会及び2000年7月お茶の水女子大学国際日本学シンポジウムにおいて口頭発表した内容を基に修正したものである。日本語文法研究会では、参加者の先生がたから貴重なご意見をいただいた。また、投稿後、査読者の先生がたからも細部にわたり、ご指導をいただいた。これらの諸先生がたのご助言によって、有益な修正を施すことができた。記して感謝申し上げます。なお、本研究は財団法人住友財団「アジア諸国における日本関連研究助成」による援助を受けた。

(投稿受理日：2001年6月19日)

(改稿受理日：2001年10月4日)

方 美麗 (Fang Meili)

筑波大学 外国語センター

305-0006 つくば市天王台1-1-1

mnd@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

‘Location nouns’ and ‘motion verbs’: A comparative study of Chinese and Japanese grammar

FANG Meili
Tsukuba University

Keywords

Renngo, Lexicon, Collocation, Categorical Meaning, Valence

Abstract

With such completely different linguistic structures, Japanese and Chinese provide a rich terrain for contrastive linguistics. This paper describes aspects of the relationship between the lexicon and grammar through a comparative study of the construction ‘location noun + movement verb’ (LN & MV) in Japanese and Chinese. In Japanese, as previous studies have clearly shown, phrase meaning is determined not only by the lexical meaning of the noun and the verb, but also by the noun’s case particle. In Chinese, on the other hand, phrase meaning crucially depends on word order and collocation. For example, while the Japanese phrase 「国を 出る」 (“leaving a country”) corresponds to the Chinese 「出 国」 (“go out from the country”), the Japanese phrase 「田舎を 出る」 (“leaving one’s hometown”) does not become 「出 郷下」 (“go out from one’s hometown”) in Chinese. In this case, Chinese uses a different word “離開”, whose meaning must be described in terms of its categorial combination with the noun 「離開 郷下」. This lexico-grammatical relation between the “movement verb” and the “spatial noun” in Chinese has not until now been well described. In this paper, I examine data from literary works in Japanese and Chinese, before presenting a complete classification of the meanings of LN & MV combinations in Chinese. This classification is not only used to describe the differences between LN & MV in Japanese and Chinese, but also employed to highlight the fact that, in addition to the concept ‘grammatical relation’, we need to recognise a set of ‘categorical meanings’ derived from lexical choices in Chinese. The paper concludes by considering at which level contrastive studies between Japanese and Chinese may best work, given their different linguistic structures.